

背景

○海洋マイクロプラスチックは実態調査が先進国を中心に行われていたが、調査方法や単位が異なるため結果の比較が困難であり、国際的に強調して対策を講じるための基盤となる科学的知見が不足。

➡各国の調査データを比較可能にする手法の確立（調和）が求められる。

これまでの経緯・取組

2015年:G7エルマウサミットのフォローアップで開催された国際ワークショップにて、日本が海洋表層マイクロプラスチックのモニタリング手法の調和等をリードすることが合意。

2016年:環境省で調和のための検討を開始。論文のレビューを行い、世界中から有識者を招聘して国際専門家会合を開催。

2017年:マイクロプラスチックの分析手法の違いによる誤差を比較するため、10か国から12研究施設が参加する標準試料を用いた室内実験プロジェクトを実施。

2018年:マイクロプラスチックの採集手法の違いによる誤差を比較するため、実海域にて調査船を用いた様々な採集方法を複数回にわたって実施。

2019年:5月にガイドライン「Guidelines for Harmonizing Ocean Surface Microplastic Monitoring Methods」を公開。

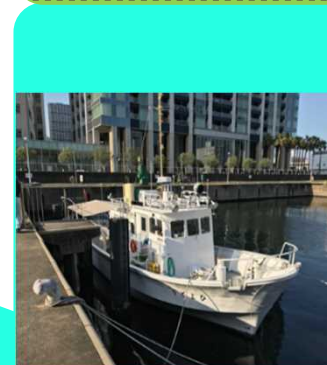


外洋と内湾を模した2種類の標準試料を用意。
マイクロプラスチックと自然物の粒子を含む。

○マイクロプラスチック



○自然物



▲調査船



左舷

右舷

調査船を用いてネットの種類、網目の大きさ、曳網時間、曳網場所によるサンプリング結果の違いを調査